

愛しき者へ

上

中野重治

解説 澤地久枝



愛しき者へ

上

中野重治

中央公論社

愛しき者へ 上

定価一八〇〇円

©一九八三

昭和五十八年五月十五日初版印刷
昭和五十八年五月二十五日初版発行

著者 中野重治

発行者 高梨 茂

印刷 精興社
製本 大口製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八―七
振替 東京二二三四
検印廃止

目次

一九三〇年（昭和五年）

7

一九三一年（昭和六年）

103

一九三二年（昭和七年）

106

一九三三年（昭和八年）

204

一九三四年（昭和九年）

331

昭和の青春の書

解説
澤地久枝

209	8
276	27
308	53
318	100
331	103
362	111
379	138
385	158
395	201
417	204
435	

澤地久枝

愛しき者へ

上

一九三〇年（昭和五年）

1 原まさの〔政野〕へ

八月五日

東京市外野方町新井三三六豊多摩刑務
所より東京市外滝野川町田端四四五へ

八月五日（火曜日午前）〔第一信〕⁽¹⁾

とうとうこの手紙をかくことになった。裁判所から電話の代りに出した速達も届いたろうし、この手紙の着く前に面会にも来てくれるだろうし、また元より気の利いたお前さん故、この手紙で注文する事の大半はこの手紙の着く前にやってくれるでもあらうと思う。

なお、ワシ等と一緒にいた期間は僅か一ヵ月であったが、私にはお前さんが十年もつれ添うた古女房のようにはかと思えぬので（また叱られることである。）アレヤコレ

ヤと胸に溜（ため）てることはこの次にして（一週三回手紙が書ける）、今日は事務的な注文だけを並べることにする。

一、差入れについて

イ、衣類 例の黒い単衣^{ひとえ}一枚の着たきり雀で来たものだからちよつと（ホンのちよつと）困った。とにかくシヤツ、キモノ等が二枚ずつ位いつもあればいい。ただしここで洗濯が出来る（自分でするのではない）のだから一ヵ月に一度位入れてくれれば十分。留置所にいた時のように三日にあげず持って来る勿れ。フトンを入れるとしても急ぐに及ばず。出来たら腹巻を入れて下さい。

〔欄外〕鏡を一面差入れて下され。

ロ、食物 この食物は中々上等だから飯の差入れは

不用と思う。ここでオカシ、トマト等買えるが、外は物

価暴落だがこは恐しくたかい。それで時々「板チョコレート」「ドロップス」、何かクダモノ等を入れてくれれば有難い。カンヅメもはいる由。(時々とは一カ月一回ナイシ二回の意。一度にたくさん入れるべからず。)

ハ、書物 菜根譚なるものをよんだ。又幸田露伴「五

重塔」、「新選長与善郎集」、「千家元麿詩集」を注文した。

それで次のものを順序かまわず、お前さんの方の都合次第で入れてくれ。手元には四冊しか置けぬのだからそのつもりで(ただし、字引、経典は別)。

片山正雄「独和辞典」、ハイネ「ハルツライゼ」(郁文

堂か南江堂出版日独対訳のもの)、「左千夫歌論集第3巻」、犀星「生立の記」(名ヲカイタ紙ヲ取ツテ)、「新選

武者(小路実篤)集」、藤村「破戒」、トルストイの何でもかでも。バルザック「ウージェニ・グランデ」、スタンダール「赤と黒」、ホイットマン「草の葉」(これはこの頃

中野重治はその生前に、数多くの手紙を書いた。そして、一九三〇年八月五日の日付をもつ手紙は、この年四月に結婚したばかりの妻政野(女優の原泉)へあてた、生涯の第一信である。

出た訳本と有島のとも一人今名を忘れたがある詩人の訳と三つあるがどれでもいい)、ベルハールン「明るい時」(名は確かならず、高村光太郎訳)、徳富蘇峯「日本歴史」――新聞にのせている――(徳川末期から維新の分が本になったら入れてくれ)、文芸家協会の小説年鑑、その他歴史物がいい(挿画や写真のあるのをカンゲイ)。

なお北畠親房の神皇正統記、大鏡、水鏡、保元物語等注釈本があったら後でもいいから入れよ。どんなブル的のものでもかまわぬ。そこはシツカリしたものだて。

もう余白なし。「旧約全書」も。

コレとイッショにスズ子ニモ出シタ。

重治

まざのどの

(1) 原文に「第一信」の記入はない。しかし、同日付の中野鈴子あての手紙にもあるように、これが事実上の「第一信」であり、鈴子あてのものは、「第一信」そのことでもいうべきものである。したがって「第一信」「続」としてある。

この第一信をはじめとして、郷里福井県坂井郡高柳村一本田で自作農をいとなむ父藤作、母とら、そして、嫁ぎ、あるいは嫁いで不縁となってもどった妹たちなど、血肉をわけた肉親にあてて書かれた恩愛ただらぬ手紙が、中野さんの生前に言及されることもなく、ひっそりと埋もれていた。

愛する者へあてたこれらの手紙の過半の受け手は、妻であった。夫妻のただ一人の子・長女卯女あてのものもふくめて、中野重治は一人の息子、夫、父、そしてなによりも一人の男としての率直な真情を手紙の形で書きのこしている。

「とうとうこの手紙を書くことになった」

というさいしょの一行を書く日、中野さんは治安維持法違反の未決囚として、豊多摩刑務所の独房にいる。重治・政野夫妻は結婚してやっと四ヵ月、いっしょに暮した日は二十日あるかないかで、まだ夫婦という実感さえもち得ない夫婦であった。

二人の結婚の挨拶状によれば、この年四月十六日に結婚したことになる。これは四・一六事件にちなんで二人が「選んだ日」であり、その一週間か十日前からいっしょの生活はあった。

二人の結婚は、「驢馬」の同人・窪川鶴次郎（当時、作家の佐多稲子の夫）、西沢隆二（ひろし・ぬやま）にうながされてのもの、いわゆる恋愛結婚ではない。

結婚をきめる前、二人は二日にわたって話し合った。原さんは小学校時代に生母を失い、小学校をおえるとすぐ奉公に出されている。母の死後早々に再婚した父への反発もあり、十代で上京して自活してきた。郷里から妹二人もよびよせ、逞しい生活者として生きてきて、左翼劇場の女優になっていた。

女は男に従属するものではないと思い、女の自立性を確保したいという気持が結婚の前提としてある。もとより女優もつづける。この原さんの主張に、中野さんは納得した。

中野重治はすでに詩人として高い業績があり、小説家・評論家としてもよく知られ、日本共産党の影響下にあ

る日本プロレタリア作家同盟の一員であった。

原さんは二年前にプロレタリア演劇研究所へ入り、やはり日本共産党の影響のもとにある日本プロレタリア劇場同盟に属し、左翼劇場員として演劇の勉強をはじめていた（当時の芸名は原泉子）。

市外（現在の北区）滝野川町田端の借家に二人は新居をかまえるが、のちに詩人として知られることになる重治の妹鈴子が同居し、二人だけになる生活時間はほとんどなく、同居の二十日間も、あわただしくすれちがう夫婦であった。

五月十六日、作家同盟主催『『戦旗』防衛三千円基金募集のための講演』で関西へゆくべく、中野は田端の家を出てゆく。

五月二十一日、中野宅は特高におそわれる。あるじの中野重治を検挙に來たのだが、不在とわかると、政野、鈴子を検挙し、さらに網をはって待ちかまえた。

たまたま訪ねてきた政野の友人がつかまり、つづけて訪問者の窪川、西沢もつかまって、滝野川署に留置された。

五月二十四日、関西から東京へもどった中野は、帰宅しようとして田端駅を出たところで検挙され、滝野川署へ送られた。

中野の検挙とひきかえに、事情はなにひとつ知らされないまま、妻や友人たちは釈放になる。

夫が滝野川署に留置されていることをたしかめたあと、共産党に対する活動資金提供の容疑であるらしいことをたしかめるのに一ヵ月かかったという。

中野重治は七月三十一日、治安維持法違反容疑で起訴されて、豊多摩刑務所（現中野区野方町）に収容された。起訴されるまでは面会も自由でなく、手紙の発信も許されない。起訴からさらに五日たって、ようやく第一信を書くことが許されている。

「とうとう……」という一行には、検事の検閲を通る手紙であることを十二分に意識した上で、容易ならぬ出発をした結婚への万感がこめられている。この夏、中野重治二十八歳、政野二十五歳であった。

かならず看守が立ち会う面会、かならず検閲の目にさらされる手紙。「奴隸の言葉」とよばれた屈折した表現の枠のなかで、中野重治の思考も情感もとらえられている枠をこえ、みずみずしくほとばしるものをみせている。同時に、差入れ品についての細目、本の注文などを見ると、時間も金もとばしい新妻にとって、かなり重い負担のものだったと想像される。獄中でそれを推量しながら、しかし、拘禁中に許される権利は最大限につかいかつ拡大し、存分な未決生活を送ろうとする中野の食欲な意思の内容も、ここに記録としてのこった。

この年、妻あて（一部は妹中野鈴子と連名）の三十九通のほか、鈴子あて、政野の妹原喜美子あてなど計四十三通の手紙が書かれ、妻あての不許可の一通は失われてしまった。

中野重治は十二月二十六日夜、保釈になって出所し、七ヵ月と十日ぶりに妻のもとへ帰ることになる。

2 中野鈴子へ 八月五日

東京市外滝野川野田端へ

八月五日（火曜日）第一信〔続〕

千駄ヶ谷署から移る時日が一日狂って来てお前さん方にツライ思いをさせたかと思う。

僕は、単に元氣であるばかりでなくますます元氣だ。

ここの生活は中々立派だ。それは追々に書く。

今日は私の留守中に部屋貸しすることの話——というよりもキクオさん〔驢馬同人・宮本喜久雄〕の場合だが——について考えをかく。私の留守中誰かいてくれる事は大いにいい。その人が若干の金を支払ってくれる事も大いにいい。だがキクオさんの場合は違う。私の考えの全部はいろいろの関係上ここにかけぬが、キクオさんについて見ればいろいろ個人的問題で気をクサラしているかも知れず、いろいろと問題が複雑して来てると思う。そこ

で私達の家に来ると一部分ではあるが気が休まるということがあり得る。気の休まることはいい事だが、今の場合は、僕は、気を休めず、内外の苦痛に対して敢然立ち向って行くべきものと思う。何らかの意味で人生に甘えかかる一切の分子を自分から叩き出して、苦痛を経て偉大な人間になるべき時と思う。僕は彼が、単に「善い人間」になるばかりでなく「偉大な人」になることをのぞむものだ。彼は偉大になる「義務がある」。

幾ツカ「幾タビカ」辛酸ヲ経テ志初メテカタシという言葉は俗っぽいが、この「初メテ」つまり次第次第に、ようやくというような意味にはケンソンであると共に不拔のものがあっていると思う。

変な文章になったが誤解なきよう話し合せて下さい。

タキジ⁽¹⁾「小林多喜二」の差入、西田⁽²⁾「信春」の差入等よろしく。西田に、金があったら五十銭でも一円でも差入れよ。

ユーモリストになること大いによし、されど出世の道（世をすてる道）は世をわたるに在りで、強いて世に逆う要もないだろう（君がそうだとに非ず）。とにかく二人とも巴^{とも}・板額^{はんがく}のような女だから心配はしていないがシツカリやれ。仲のよいばかりが能でもないから時に

はケンカ・組打ち等もやれ。

まさのへの手紙に書くべきだったが、家へ手紙をかく積りだ。この次書く。それをいったん田端に送るからそれにお前さん達の手紙をつけておくれ。なおマサノは出雲のお父さん⁽³⁾に対してあまり高飛車に振舞うなよ（これもオセッカイだ）。

運動場にある草 アサガオ、カタバミ、桐の芽生。

いろいろ世話してくれる諸君に千万よろしく。いづれかく。体操をやりなさい。金がいいたらマー公⁽⁴⁾は雨ふり時の靴を、お前さんはメガネを買いなさい。今日はこれだけ。

鈴子様

兄より

- (1) 小林多喜二、昭和初年の日本プロレタリア文学の代表的作家。一九三三年二月、特高警察により殺される。(2) 西田信春、中野とは東大の新人会時代からの友人。日本共産党員として一九三二年夏九州へ派遣されたまま消息をたつ。警察によつて虐殺され、その経緯は戦後も長く不明のままであった。この詳細は一九七〇年、中野・石堂清倫・原泉共編で「西田信春書簡・追憶」（土筆社）としてまとめられている。(3) 妻政野の父・原金三郎。郷里の島根県松江市在住。(4) この検挙後に使われるようになった政野の愛称。中野重治以外にこの愛称を使った人は

ない。夫妻の間でも、特別の意味をもつよび方であった。

3 原まさのへ 八月七日

八月七日（木曜） 第二信（この前のは二人に対する二通ともで第一信とする）

一昨日面会所から監房（東舎第八房という）に帰って来ると間もなく、フトン、モーフ、ザブトン、シャボン、タオル一、オビ一、越中「ランドシ」三、単衣物二、シヤツ二、ズボン一がはいって来た。どうも勿体ない位で感謝にたえぬ。なお腹巻が差入品目にあつたかと思うが腹巻はなかった。差入れなかったのならいいが、入れたのだったら一度おしらべあれ。

ザブトンの花の模様氣に入つた。九月いっぱいには毛布一枚でたくさんと思う。またキモノも（もう一、二枚は持つて来るのだろうが）九月いっぱいには不必要と思う。もし余つてたら他へ廻しなさい。竹の模様の単衣は実にシャレているね。衣類すべてありがとう。

昨日は夕方になって弁当がはいって来た。イカ、コンニャク、魚、貝、高野豆腐、茄子、シンコ等スバラシイ

御馳走で咽喉を鳴らして頂戴した。こんなのが毎日一度ずつはいつて来るのではないとは思ふが、一昨日も話した通り飯類は十分（と行かねば八分半位）だから、毎日入れることは絶対に不要。ただし一週一度位入れてくれれば非常によろこぶ。その際は水曜の晩飯がいい（日曜には御馳走？ が出る）。ここの生活全体を考えて見るとそれ位がちょうどいい。そしてもし出来たら、思いついた時でいいから他の人にも弁当を入れて上げなさい。いつか林のおばさん（林房雄の母）が砂間「二良」に井か何かを入れて、そのお札の手紙が来ていたが如何にも嬉しそうだった。

知らない人でもかまわない。原まさのとか中野すず子とかいう名で弁当が行く。誰だろうと考えるが分らない。分らないだけいっそう喜んで食べる。そうした名は外の多くの人の一部であり、外の多くの人が自分の事を気にしてしてくれることの証であることを感じてその人は勇氣を百倍にもするだろうと思う。その時はまた食った弁当がそれぞれの滋養分となつてカラダをまわっている時だ。一つの弁当、一個のトマトもこういう所で外から貰つた時実にうれしい。今日父にあてた手紙をかく積りだ

ったがあれは明後日に延ばす。その代り窪川〔鶴次郎〕に本のことを書く。

面会した時中々元気で安心した（元より心配なぞしないが）。警察にいた時よりも肥えた気味も見えた。鈴子もウンと太るべし。夏ヤセなんぞは当世ではない。

いつかも言ったと思うが私の留守中次のものを取そろえて置いて下さい。

戦旗、少年戦旗、ナツブニュース、作家同盟ニュース、産勞時報、インタナシヨナル、その他（その他は一任）。

戦旗社その他の出版物で窪川と相談して必要と思うものはやはり求めておいて下さい。これは大きな本よりもむしろパンフレット、リーフレットの類に關して注意されたし。

森山啓〔本名・森松慶治〕に金五円借金があるから返済たのむ（彼は福井市在住、私は住所知らぬ、誰かに訊ねよ）。それから根津の医学校のそばの森何とかいう古本屋（モト郁文堂の番頭をしてた人）がある。窪川達知ってる。そこに金二円借金があるから同じく返済たのむ。

まだ中々暑い。こないだは雨で涼しかったのだね。刑務所には一種の深い平和（？）がある。平和といつては

間違いだらうが。今日はシャボンを使って風呂にはいる。いろいろ書きたいがフーカン葉書では足りない。こんだは手紙にするかな。留守中談話等取らせてかまわない。そういうことについて僕の考えも漸次変化して来てる。差入物をかかえてケイサツから警察をまわり、又刑務所へやって来るお前さん達は私に白い卵を抱き上げて巢移りをする可憐な蟻を思い出させる。⁽¹⁾

セの一〇〇番

重治

まさのどの

（1）一九三一年秋に発表された詩「今夜おれはおまえの寝息を聞いてやる」のなかに、このイメージは生かされている。

4 原まさのへ 八月九日

八月九日（土曜） 第三信

一、山、進化学経緯等の書物ありがとう。こないだ面会の折、どんな本を入れたらよからうかといういろいろアレヤコレヤと考えてるという話をきき、この野郎共奴、昔レーニンは「人はひとときのパンで党をつかむ、何の力